法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

五音三曲集

能研
2151

五音三曲集

夫れ中楽寮なれハ音曲習道のため鼓
をもて見聞のたのしミ和歌ハ和国の風
俗をあらハし神明も感應ありとしるを
折りをもて古今の昔吟曲をふくミて
うたふを音曲といへ知りなから言ふにて
流れなきを志ゆうにいひことの葉よわく
言を詩といふ古今のまな序にも和歌ハ

手根を見地は律呂節を詞枝とい
ら絹とかけり是みな根よりおこり曲
味なりしそれのことふくらうのを書曲とハ
一つの根よりおこるくもてうちふくら言斗
出て曲はたの根也しかれハ五流相の道に
大意ハ経なり祝言幽玄恋慕哀傷
闌曲なりされは其波肉骨は三曲の字をまとと

かかりの色ハ口傳なり又和歌は十体
の品同じの也むかしく古今とことさて言
連歌の曲味とおもせり大意本歌のうちより
おさめて曲は志ぶくとしつらくとあるなり
○五音三曲是又祝言治世安楽音の曲味
毛詩
おき海まつらの歌ハやすくして
この志むとハいうハさし安楽音の字性

を絶ぬ事を恐れてなしぬる故
代々書父塾曲まて宮地林をわか世
曲なりあるつたえきこえぬ縮布なるに
之の流をうけくそてなかや
うる新曲をなすとふかて浅く
なること付ほて曲に海とよ
骨柔をて病性根なり舞始の旅

云まんのかせんする今年傳
落ちもしらぬ秋万歳関ゑと
いふうたゐ百方云

古今序曰
青野まつの葉ちらすして一万代を
つたふつたてわたしらん

骨柔伏見ノ文ニ曰
まさきのかつらなかくつたはり
志圓のあとのあるもの小かこゑくるや君

とふ柱の神あまくたり八嶋の国をはしらを
きをつくりたまふ大嘉の御けのと
宮ゐ世まかや　あめのよしかみの久かた
の神のくすしかりぬ都縁のまく
如月こそすむやは代々も星霜
はふり大国主のみさゝきよ
殿の内もきよみくらし

祝言第二　理世撫民の曲

此曲者地躰喜におさまりて世をことゝか
民をあはれむ曲婆の滋味あり　云

仁徳天皇御詠

高き屋にのぼりてみれば煙立つ
民のかまどはにぎはひにけり

内侍所大呂

抑宗廟の神として嘉をまもり国家

ともうけ文武ふたつの道ひろく九重
はしめ仏儀山神ふも用有ハやはらけし
これ諸仏世々の本意也されはとふ
ともかみそれハ一心の道とあるへし
人倫不二の心をもて三直代の人は施しら 曲亭集
かふ人の國より我か國他の人々かしの
人をもわらセ給へ世かわらゑ君ありけりや

契ことはのあさ海しき海をひとてし
わ人のれの如提本もわかりて教和
尚の法の水をうけし彼の都しも
らぬ南山まても月花えもみえの たとも
これはそれより流れまさりや宗
広しおもかく君の世のまくおみうち
わらし國をみつゝの海をまもれわさ

ふしきなれや御舩ハ海のおもしろかりき
利益衆生ならハ二世安楽の神
法ハ行さらんや青山ハ松さへ多
楠も草もなひく風のみなもとの色
まうてし雲の山おろしのかけきよく
さんおうの御身かさね秋草もいと神さひ
て月の都の岩清水のわきかへりぬる

かしこまりわきかへりぬらん

或秘書は秘書に世挟民の紳
と申こそしるしのまゝにけるなれ事
とかく猶やすさとつり

禁中事は入会の諸人こそふれふを言葉の哀れをかけ
禄民寿を続て清華に落ゆ

○祝言第三松竹曲味

此曲ハ松杯の詠集にえらハれしや
宮祢をひて年ふるかわり峯
味有り古実云
経音氏松と秋風吹わたりし
葉よりもれつる直にしかこ
骨味曲節
さ様にやニ祢乃山和歌の浦に
此一滴のことわりもしられ給ひしより

しかも大海の国をほつきの不織
滴ひろがりしよりいろくづの八道をしろしめし
日神月神ひろこれさのおさまり穂
太代のたしかに波浪の由緒なるうえ
皇孫ハひろかに大国をおさめたまひし地
神わざの心てこのみことをかけまくも
云ふ記世とも ちよとそうらふた

まて八十三首六千首餘蔵りかく御
そてうさる子うらの歌を注はり又
の維新とあらくれなつ御ちいさ歌さへ
それこの歌代もかくいまの國とかや

或和る極書よるさくしきてさやも
せぬていて直くのはかしあるとも
多の事之やね体とうり

○祝言并行躰曲味

松は君の代の御行よしかりうひき
人の餘情の曲きなり古人云
よはくこそみなりかし難波の
葛代ち葉をもう徐るそてみこ

波葉し云
おりし纏や花雨は浪くおく寝をとも
まこきちのしけ多かさあまれ出在

秋の和歌よりちかいのもとゝしわさりま
こゝ月よてりるふ春の日影ゝを写
よ年すら山ひわきめくこのわりくしきしにこ
とさらに時しわしわか春の色ひりしとき
深くもちも野やみしりしとあり若菜
の山みなこの都の空くらぬ神代から
風あくいりりしきかし山このの山ひめ

の衣かと神あひのまんれ。露かゝ宝も上なか
らむゆうしの春てふく霞の
衣ぬきさらきことのみえれとわまつ
日代のうけさしてよえめかて衣あき
めのうらく松のやかの浦まに浮かし

或和哥に松書まつの緑まなかゝ浦
ちよかゝのかへきゝ少しわかへしといへり

○祝言第八　長高行曲味

そのかみはらけうくちえ海とは

おもしろき曲節あるへし　百王公

思事叶とゆふ人はあらし

あふけはいよいよ月さやけき

骨味たいと出たる曲
夫鶴や百王守護の日光さいにて浪

あゆみのさなく万代の秋ぞかしこき和光の

新しくりかう御神と君とは八幡の浪哉

関とかや老人なりすみよし月の光ありて

こゝは海とや清き新はさらし

我秘にて秘書ます次のはしき天性と

いふり

○文字三曲第二　幽玄　心詞幽玄曲味

此曲味　花紅葉のやさしき風情

又ハおもすのかたくみすかなる奥なる寄
て来典侍さて鳴越清の西國に
御命し古今云
むかしの御代はわすれみし 思ひより
あらそひてうち錦
さ敷きふものさひしさ 杜氏歌人
同御代れたる藤原の春風うけすさ

て月しろくふくる折節の花もわすれてすゞしい
うつくしきのふる秋てうつりて後事を
さまかうつくしけれ御事も思ふ者の人ならず
世の事なれ えとうてならまのも
かけのえてのいとみりひき残法の
恭み海らしいもてしさ世游あちかい
く宜ふりとみえて春風ゆくぬ画

あはれ山松はなみならぬの秋風は松の
葉のささ中までも嵐は心尾をもさ
うはれは世の夢の松ふれをとふりさめ
て御しく

或相伝秘書にいはく聲をすかなる曲
らすといへり

○幽玄第二 引雲 廻雪曲味

是は花のよをもひのかりなる錦
繡の衣のうらしらへし古人云

引雲者 下りては画きたしかりくり
詠のき雲にたてそ曲しかよ

廻雪者 風吹いらすり鳴流れとおもひ
扨のもね流よきくいのおる曲し

骨髄 山深くして秋風に流はすまし花をにほ

ばゆき平の中納言関吹こゆると詠じ給
ふうらはの波のよる〳〵はげに音ちかき
あまの家里はなれなる通路の月より
外は友もなし　げにやうき世のわざながら
ことにつたなきあま小舟のわたり
かねたる夢の世にすむとやいはんうたかたの
汐くみ車よるべなき身は海士人の

袖ともにおもひをほさぬ心かなかくばかり
へがたく見ゆる世の中にうらやましく
もすむ月の出塩をいざやくまふよ
かげはづかしき我すがたしのび車を
ひく塩のあとにのこれるたまり水い
つまですみはつべき野中の草の
露ならば日影にきえもうすべきに是は

風をたゞしかも縁わきまへたる草のいろ
はしよりも海より中くもりてかく
し
上哥 曲舞 さし
それ和歌を詠じては神もさらに親しく
こゝろの花もこのはにまでもうつる
折り 業平は心の山あかつきてこと
たへ(?)ぬすまかくし志賀の都の色
ありてかれいのみなもとをうぢ山
のきせんがうたはことばかすかにて秋
夜月の雲にかゝるか小野の小町が歌は
のなこのみあはれにつよからず
いはゞよき女や大伴のくろぬしは薪
をおへる山人の花のかげによみてさ
はしよりさやかなる人丸は和歌の詞

あれの花をみしハす手種をうかむ吉野
山落花ハみちをうつむも古今のしかれ
あらへかり
或和歌秘書ニ紅の迫雲ハ幽玄なれ
ちら花緒情にも勝て落雲も月と鴬
うらにもかひ花雲の風よりもあぬ
思ひとて心詞のかゝる歌のうちにへ

しとふたり

○幽玄第三　見様曲躰　見様体

花の峰の端をかゝり耳見とかな
つすの曲躰景中よふわりと古今云
下紅葉ちる萩山の夕時雨
ぬれてやひとりしかのなくらん

羽宮
博楽上
志向んせし一二くわいゝ千金花よせつきや

う月よりけ雪ふせんことふもかつしら今
しさかりや花しく雪は地も花よりや
花桜は雲間よりの雪しちる梢めし
のさかりふ花と逢てちるや一つ如々流され
衣ふしりふ花の都は去の空雪ふときさ
め空にほふかし春陽のけみよりめて
風のとり如青羽の瀧志らいとのし

くれも其しるや花鏡や地主権現の
花は色もこともあり人のまこのめ志らかれ
衣のさしも草和世の中よおもしろ
ま八内出世逢人ふうし物も清水の
みよりもさすや吉御の雪ふもてれ
うゆ木かりとも花桜にこそおもし花
の春ともかきつての雪とも新ある

の天と霧りたるや雪の春なるや
をりしりがほのけしきかな
小方曲節序
柳ハ天のうるかしハ雨露の恩のらうを
えだおかしく雪月花の三の時をかしむも
霞うれふるれ梅ハつゝみたる梅をさそて
きくりちるまでも雪をわすれて色もまし
夜ハ有明の月の影の行くれゆかしき庭ハ

名ぬ私花のうさき秋ハ雪にわすられ秋
きしきあすれてまた月の山の端にかゝりける
てもかるぬ雪とところかけ大野々の原
菊まそとすハ初雪を待ち蛛さえ霜
のうさやあまりけん
我和る松書は柳ハつくかれ
ほとかくつやくらまほしきす

ところへしまれも湛然る所なくやまて
らうろへこそ佐なり京気なとそれ
萩めきうけてもしかりといへり

○幾
豪爽空壱白新曲味

峯懸曲味なれもゆるまうけありてか
のうる新曲なり古云
天地をも動しぬるとなるなり

秋代の月も亂れのこれ給
関味ようなし
義かもしうれ見山志て称らもゆきるや
みゆしれしきのやかよらつく志て雲の
高間の葉のにらうふのみそやくみ外を
にひのきやすいつくみる而山白のりとな
まやえりな花まかの数へつるくなり
古いおわるのうるん外旅やえずれしるくも

おもしろきなるは舩のこゝろして様々
のふかき哀れ流れとゞまらぬこの
かぎりしまちの波にのうれしさて心
のおもき心をへだて移ろふ様に様々
なる朝くれ山のなれ露かぞへ玉かの露つ
くらしかりし

或記云猶此歌の秘事は其の秘首尾にあり

つらゆき人丸などは詠むべきすがたと
いへり

○幽玄体又有心体曲体
心ふかくことしくきこゆれども
[illegible]ことさら風情曲体なる心也

津の国の難波の春は夢なれや
蘆の枯葉に風わたるなり

闃
あか八男山代もしを思ひそく我萬葉の[illegible]

せう給ふと云ふもいかゝとしりことのえんなる
錦も色そへて秋萩の花の咲たるにさへ
まほしきほりかはりかはされいかにまま
おもしろくて見とゝまりのりあまてここ
その花はうへなくあはれなにはつにさく
やこの花冬ごもり今は春べとさくやこ
の花とよみ給ひたるに仁徳天皇をさゝえさせ

給ひし難波の津の帝の御事也大さゝきの
ことのえいは梅の咲さうつりたるあへを梅
の名しきとやらん此二首はまたてとうたしく
もて給ふ梅は伴ともわすれ給ふさ花ものこ
とのえらさの歌とりて秋ことさの末
らぬたるかなくして是れを目ふみえぬ
君祢もやとりたる宿との梅ぞ四かくさ

むかしやまのおくにありける事も今見のこと
にきこえさせ給ふはこの國のならひの風は哥
那あはれ世のつねならぬ風になられはほの
かにいはれたるもあきらかなるやうにて
のちの世のまことをみはてぬ浅さは
とこの道は流させやうとてあるは
あはれ深くのこしみちぬるかなしも

まことにさりとふことのはなれしられ

或和哥秘書に有所をとりて正極
らすなしといふへきもの事と
これなきなきよりうまくやうなるを
みなりともなれとまたの所にも桜
して観世をかきとしへつかす有所
にもあるその品あるへし　観世桜柔

も笙より出る風情也ことことくら
むつかしとなり

五音三曲第三　寒慕　濃祈曲躰

寒兄のさひきすることちくとみ
やうまこ雨やうたちもふくうえある
祈曲也　物寒之のさいうち紀かなし

古今云

さむくて暮まをも嬲しおとおかれ
うつれ山路に嬲し　なる〳〵
月を山はなれぬまは扉をわけて見
とをさ袖これまてまは岩のまて雷
おかやてまを知し　ゆふ風の嵐南西
のきいつれか思は暮れなふきし〳〵秋
風の音けしきの山まいさそて秋は

むしろ劉ならふさせめて袖もぬれ
いふもさらし枕のうへもさらへひとり
ねやもうりめけるや　すゝろしさけぬ
いかに草庵の上雨しけき海の夜
もかくもかゝるうき涙をもかりきれ
とかく世の命のさましられて
草の露おもいつくへきひとのさまか

その(?)まゝきえのきさめニとも誰かさそは
身つていさ世もそれかりすらんまうれも
まの寿秋よりきよきはなをゆふの
数はうき斯れとわかことゝの人をめて
うねらへはりれとも乙かなよらけて
みちのいへにろうすみしれゆふ暮の秋
風嵐山おろし耳ならしもあれ松をこゑ

とゝろ御ほとりの人〳〵乱妻をとろき
か浮世せめてとの心えの扇手ふれし
て風の身よりも思ひも夜もすから枕
のまくらの秋風のや庭の吹おろし
せめの扇も置かれは若とくともすさみ
しらて秋風うらみわりしや松くれ
よそもあはれなりし婦へきものなりけり

今の世までも人の心もしらぬかなしきも
たえぬ身のかたを思ひつゝ言そひけりぬのたえ
ちよう移りぬれさしくしき
或ひは御書の紙とさかいつまへ
て初めの時うらみかうて詞つゝ
つきあさやかなる口うろうなつさし海よ
為しきつゝもことりくうしわすささそ

ゆゝしかりへしとなり

○薄暮第二 襲裾由緒

塵もありしいにしへより こゝろせらるゝよう

ゆかしき面影なりし所に

かのくさの庭をしのわきけり

しのびれ給ふ事もありしかは

六因縁
二ハ草の露とも思ひけれとも行末も

こゝに小松殿の三代目のちゝへやゆかしきの御代

うちけしからぬありけりとなけきしかは男

君ありけれはのちに思ひけれともかくや申さ

れの中納言ニとなりて後ものうらみ

のかりしもよりのかくみえて御その

しきうきものうきも思さりけれはあはれ

いよいよ深しのちハ草木すらみなしをれぬ

のみ

のちも見すゝれしうちありさまやうゝみ
これハまへおもかれ是ミ見すめうひま
とありけるとらみけしもこともや於思
これハかけれ爾くまめさそしわかぬ
りうら御ことゆけそこのし契りの世ます
むかしあるこそ見れるみもよしりと様
てもおりけれそれしおりけまうら海より

おきふしまて枕より地より心のせめ
てせ見こおとこにしか志ち心事れ深し
こさ

和歌ハ三体にもこゝ志ハ数よくか
かれハ之をかんさるへし

○五ヶ三曲第一哀傷・魂白林曲
是ハ無縁生の亡心をとむらはるゝ

魂の中地獄かやしよみかやうよ
わか身をそらに夜ならん
あさちふや袖にくちにし秋の霜
忘れぬ夢を吹嵐の風
さし
夫三界無安なほ如火宅の二心
たゝ仏もことわりし御しや熱悪の生と
あてこれ海をひのうきつうき雲水の

世のあはれさよいつかうかうらん無明のかきたら
海へつくとさき地獄一生は風前の灯の夢
身の間は我やまとく三界は水のうへのあは
のまへはきえ〳〵と次いりたる九ゝみよ八有
おれの助けそはや仇すのちやうのうらよ八
むかしの色思ひこありとおや常観は先寂
の教きのかいさかんなれらもいそとる

ぬるゝ袖の秋は露わしくもなしとも
よる見もとも露より秋をゝくて能し
し雁おと峰より雨聞えしての声
みすてゝ帰る雁のこゝや妻こふらん
あさうかれ荻の葉の露よりもけし
ここちかけるふかあかつきさかれて
世を秋風はふかきも遣あかつき

露とおきて志賀の山かきの一むらもなく
みちを志らすゝしあらねすくなく
いとゝかいなしてなつ宿き
此曲はことの骨すゝむ所の感
哀れかくとしく念珠して思ふ

○哀傷第二 物哀躰曲味

諸行無常は世のことはり諷

すゝきかるかやはあられ露はおく霜
思はぬ外の野辺わけ行古郷
小篠原風もいよ〳〵さえまさりて
骨末曲節集
その一ふしとおもひそめし
はるゝさなかたふけのこしのむす山
かせふきたえの松の木よりふきし嵐
うらみをかへさんゝふかきかりそめに

かれたりけるを見え月は秋ふけ行風の聲
あはれのことくにけしきさすにも霰よろ
ふしてうちふくこのゆうかれかよふみちそ袖
つり舟の中のきりはれ夜半の雲霧
松にてやきかりしこゑものこられ無し
ゆまくらかよひて風のたよりかせん
君をまつかしの小柴垣あてことゝえ

のりのりはちらせはらはらと世をすてゝ人つらき
なきなくと時雨しぐれもまはりみえつく
さつけるふのあはれはものかはさえや
と思ふきはかはり

上
あてもなしあはれきこえむ月日くれぬ
かはりゆくまでにみえつゝは面影
のこるとめあきまで世のかはらぬ人間もれいの花

きりもさみせ嵐吹きはらし立ちや
の月の我不定の夢もはなれ行く前
ろうきせ目

或初の秘書によりて見本懐
あへき思案かりつまでくらへん
ときつき事もさりけり

○文亀三亥年八月[illegible]○陳曲・拉鬼棒曲

此位にひかり喜曲をそなふもろもろの
関塞をあまり君とけて如是堪能
の達芸の奥旨を云
およそ其数多くは此葉の露霜なり
天下の為には代宝なり人
誹諧これ方は和歌の次第にて詠めば陰
陽の二神ももちまいらせたまふにゆきあひのなさ

にれ自然ましさき続き徒を海形ば
国家をおさめて今も道ある好文ある
らずは世あつやうく守護とは世あつや
神風や伊勢の浜荻をふしてくらし
とふもわとりとも切暮のうりとさく
りのをとらへ伊勢の海のたのみをとる
のかもいふ人ゆひしきのとあ

つきうりせや日うらの寧も心ひかれて

義和ち稀書ミ是ていと世上ありきて

おりうきすとしおうたわふれと

曲更へハあひとも寄る風情信

まそぬていうつなりけおりうきます

其て格音長入ぬれハふさよくはれのり

こと柴にもいろいろりて見えのその

ものよるり骨と存して風情と立そがかり

一切のことハ法にもれて遠しとす種鬼ハ

気も中道なりこうをいつかてことさら急ぎあるへと

ころう

秋云は法はいさま手を鬼らしく八ふの様さ鬼

よりいきくものをころ知出去白拍の心やや

おりうきなて思ふうへの似とこお知ん

○闌曲第二・若年稀曲味

こけらゆうこさハ功成名とけて年来

の位に至る也よつてかゝりの端に於て花鳥八
りとうの事にて序すにあらず
蓮花後に向ふ向き却来の風
思古云
兜のあたくみさかゆりとかり
篭らゆかしさうれしやかしな
うれしやかしさてや〆しさ
骨体 かれ花もふのゆきと後の声さまかゝりも給わ

りいとうらめしく枕のうへにみを置く
はかなれいかりいさんやうかりはぬけた
うぬれ身ともまれら年月の移りて
いりやの山中におつる吉野の川かりや
世ともおもいもあるぬ風あさ海や世世
まられとうらいまい文人のさかもし
にあり婦人のほとりに去りし出来いの

みさうさりゆうちやくしてありきて
急ぎおもつるこの世よりちくしのさいはい
よふかりけりの思ひやうおもはゞ
はなさくの一句にふるのさいはいわかを
つゞれちるおもふふれましきたるえ
ぬるや侍りて様くむまで大概
とかやいまし未世かいたいあらゆるすかい

さふらふこの寺の縁起をみるに大寺
の在所鳥居ちかきやうにりて候
つら人ゆかしさてまいりけん

此草子の作者の人のむこにておはし
ます兼好といふ者也かの九条
にめしつかはれ侍り此草紙を献て
蔵人とられけり又けり

八苑の寂は四つゑやしきつゝ妙なるゝ
こうんいん
八寸三曲卅六葉曲ハ法身草
一丈三曲老序ニ縁と申ハ葉の世
からとハいふも志めて大きにあわしきさ
をあらす法肉骨の三曲皮ハ肉よりお

こり肉ハ骨よりおこり骨ハ大勝よりお
こり大勝の不浄ハ水よりおこる水の本路
一念の是字なり本字ハ経よりおこりける
本ハ経をふかく得とく此ふか妙の意味の十二
智あるをふくんて求縁念是則菩仏
果をあらす菩提の妙喜如くへし此不浄
の種骨肉をあらはすハつふ皮を似せつゝ

こゝろにもまかせてハあるへし さるほとに種
骨を忘れて肉にてあれハ肉を宛て皮
にてあらはし心をもなくよろしきやうなる
皮にてあらはるゝ 種を失ハ花ハ道を忘る
ハ骨力なかりけれハ泡のことく風に
肉目あるとしれを位にしてうつくしみ
を位といふなり 是幽玄すなはち

さきハ骨肉二ツをあらはすといへともなし
されハとてハさしてちからさにて幽玄
にてハあれとも きなり 花ハ
ハ極ての秘曲なり 第三一曲大事也
秘伝家の花ハ付て五ツ文字を位
なり 割にさしてゆへ
曲舞の在所をさして 秘道ナノ曲
第一稽古にもなるへし 第三ツの事
口伝

一 呂律中曲　呂ハやはらかなる曲也波有之
し　律ハ利きめけなる事うすきの曲
肉ある也　中曲ハ二波のあちこちあるか
急曲骨あるへし　此呂律中曲ハ唱歌
よりきこゆる事なくともきこゆるよ
よりわきまふる儀也　但志なくし波肉
骨の在所をきゝわけぬ也　地音曲の

四絃よし此三曲をとりへし波節の一句に
三曲節とうつるところよ此三曲に性根
かへらるへし　是ハ絲あり　帝方
一つより大事とみえし　帝ハ喜曲より出
あつり喜曲ハ息よりあつう息ハ丹腑より
それて帝風の根源此三曲なり　又老
秘之中の大事能稀なるへし

新古今序云やまとうたはうちにこころをとゝめ

発声の二面ともまた浄のこゑなき和

歌詞すなはち発心発心声すなはちこころなり

をまず拍子と知事ことはなりて

ことはえこえは業りなるしく起

の種魂よろつのかたち精よのかみう

若無不二非正一如

一節と華甘節曲節力節流節

懸の節上の節下節自字拾折節

自心拾折節　拾節　命節　釣針節

甘節といふはあまうさかしかれはあまよかりくさ

にれもそのこゝろもけまてしここさあらく

いふてらかしきかなよえるくとい

をせくゆふ霧よおりふくこさ二声也

こゝろつ三弁等こ秋の歌とかつ月なむ

この節甘の節なりまつと大事なり云

てうしとうさくとをせすしていひなし
月もかくれてきこゆる躰をいふなりまて
ハおもしろくとハいふ躰にてよりつよく一の故
此節ハ又曲味ふくさうにし其末ちうるかハり
文なり。曲節ハとりあへてよきよとかゝり
さてもさもさしすしと云中曲とられ雑
所をもきこえ息まちしてもこそ紙ゆるふ
風し。まよれたる曲にありて其流

あり力節といふハひゞきを高く声をのせ祝
文字を口のうちにやすらかによひき入てい
きかせゆかしくといふハ力節になそらへぬ也
力節ハ下音のまさりあり柳の時に
落葉のちりかゝるの字なくいふハ力節
也流節さかのこ色の声あるこぶ入るゝ
有りて色のあるみえをかくしてあらし

まことにかゝりよせいも喜阿と申
ハ歌の内に入にかゝりてもそのまゝ
この事ハ一定ていかゝにもいのこと
音曲なれとも(?)死の世にうつりてくちた
はかなき(?)にかたしき能の上手(?)ハ
歌のへ(?)出懸り節ハ歌かゝりかなれ
ハそれかたけ(?)もともうらかれ(?)ず[illegible]

ありかたふらん山本のうばつきさ
たかりけちいはくてきつき歌の昔の志
ふかくりかくさしいふくれとのえれ
宮も(?)宮の増え(?)位よくわれありちくなり
て細(?)谷(?)ふや歌の太夫かゝりて節
ハの利(?)じ(?)紗(?)数和尚の仏法の味よ
みふりのうつかり(?)ある羽言乃

篠まかりのあいたのかりあれハかのかりかりと
いうは川とよみてよく思ハたかにて
そのたと船橋をして川をまさらん
ことなかるへし本説ハ大きに上旬の
内様よ書し篠より前によりそうこと
説文をまやまとそれハさらし魚袖
かハと郷もしも急ら代あより代声代の

そのあり字より声かろかしあいこれ
此清ハ此母もやうあんのはちとて
ありいりて上るより字とらんまを
しかるへいうよりかろ節ハ声かくのまゝ月
これさわれ代尾といふ也よりこゑ也かり
下輪さの声かるとはかしらり字なう
波添至はこれハ七ましくともうえ

宮もとうゑん拍子に字あまりとなる
うなりひつねにふくすへふれ
あまりて拍子のびてよろしからぬも
因ありしにむかふしれなり平声
参るも子の廷を持るむも尾このまゝのうち
なりますもれ八拍子を折に目ありて言
を用に持すなり。命節ハ小あるかれも

ふせまうれてとりしおきるもうかしへれこ
ときとに性根を入て信に云こもへし甚
命ありへし月うけうふの岩清水の
さうぬるらいけふをかさしるそ
二 かりの事おもちれからハ詠吟の頃
猶かりその高所より平地にくたる
ゆるくゆ流れも吟のうちとなる

やうに節を付るとみえていくさむそし
字性の能ならと節のよろしきなり
とふかみ有て幽玄ニ曲の懸りあるへし
されは節ハ曲のすかたなりすかた
幽玄ニ上果なるをかゝり風姿と云
し節ハふしことくにしても誦吟
なりさるを本年代のうちに知るハ新

節ハ用なり声ハ体なりされハ声ハ呂律
呂と云ふ律呂のおこりより中曲ハ眼とな
曲節ハおもしろき也今おもしろしと思ふ喜
の詠吟のまゝによりて喜曲のなり
古今
とみへハ妙中高し
かのひとの名のある物の新春よ
鴻の水都の夜明て思ふ

一
是を高砂として青田のかりをうたふ也
文字に半ねる字・無字・字毒也
其字ありすも字ハあすしう字也字とい
いはれしれ稍子ニおもふところを文
字一ありすめハ稍子ぬかいて曲蔵とも書
けよさのふ如くに似られとも云れハ
二字三字にも有りとをかすならぬ

二と取られハこころもて稍子にあらずり
也これにまりて大かた此事あり
心あるし歌にもある代松といふハ書代
まし稍キ人よりのよう此ことにつきて
海の其字とめてとみて文字あり
心おりいくさことわか也是みて青田
とうかく字ハうつりいきとはせし

長曲のところとりわきてつゝきとよみすなる（文字）
是又秘事也長曲のうちはよまはすなはち
字あり此字ふして息をとをすところあり
又わの時は歎をこえあつまれはよろつと
わつさうの経よりしかるよりふゑことさら
のこえとかゝぬとなこゑとさうしりぬれと
はおなし聞わけて長曲かりこのうちよかし

声はうはれ体のこの字の思の様乃
この字のゝのいはれ字次第こゑのこゑとの
こえ字計りふしのかりよりてしゆえ字
かても申ふすなはち是を息字との
面一の声を字あいふさとうし
つてとまみむめもらでかれわさき
くけこはの声の聲言は誰作給

もろ下也　歩しは松のけや　本かりこの所
みけの形やなの本りしやのひきと見れハ
ひきこよゆつりてつらまあといふすやり
とまうめてれのあかしらまことのとい
なしろくきこ残るしめもと字よ似らなと
ともあ字ハ頂見を許ニもち申すの所
ちあすもかり見ハ名書のひきと通されハ

その字をもつてされとも其字ありにそもそ
めもと字よ大事よりわかとしぬ書始通之
ならかへし御譲のこりといふも其云
のすこしかり百首といふも良き云ハ文
在ま新文をりて御しゆられハつめ書人
ならしとの初しめ書めてこれそろのふかも
うみ

ちりとの加へ一字とハ本の書とうかれ一
字くとおくいてそとその字かき
の今もまかりうこゝ山川海とふ
一字つとゐはらみよいぬへ字のち
とひろてうくいえし全字ハ日月成ら
ひりきてのことあき吉をかくそ字
とちりとあてしまいくちかしくさ

きくかてりふ字とちりかまさかく会力
られと全してきしかくきうれかう
さうよた聞くときころぬ事なりいよ
はしおもひしられうちれてそいふ
てかとしらよ一般わつきしのとの字ちら
御ふてうすくとりふつきゝ母音なと
会君のもとくしてちおりはしし〳〵き経

何となき也それの仮字あらはれ
こそなれとていふべきといきのくはしかり
もなき也さる所ありて大事とする口伝あり
いきハ息継の所なれども其の字から
つきて候ふさき　ハさうれぬ也
二　息ニ重キ善曲のいきつかれハいきつぎ
附　花有あまりあるのうちの短曲無道

の風人おほきなるべし大きなる芸をさろへす
所給ひにより息ありて言主をはねぬ
言ふことの上曲の一節く言なれかはりみれ
出字をハ出息にていひ一節のいひあまる
入の字をハ入息にていふへし出字より入
息の用よりいでてつれハ短息にありて曲
余みし短曲なる一節ときりて後節に

うつところハ句をハきりはなしてつゞきをハ
きらぬ所もあり句をはなれて続きとハ
韻をとめずしてとめず所もあり呂
律呂とハ云ふにもはじめの調子をふ
くみてそのかはりし呂のうつりをすい
まる事なるべし調子をふくむハ律の息
也文ハいわれ字をハうけてひとも

なり文字ハかはる事あれど文にかはし
もなくてハのうみかしらはそのいきを
ひかへ弱きにて調子をふくめはずめ
うけ所律の息をあらためまれハ声も
はじめもなくて国のひゞきのうちへし
宮商角徴羽の五音位高下のきはみ
きこゆ雅よりハむつかしきハ声のかぎり句を

こゝろすへて字しらを出典のふきハめ
うち上下の位なりたとへハうきぬれやせ
風波の難をのかれしハおりゆかり
しかるみなりゆきも實あてゝ入典をい
事なてし文字かてにいきをつれハす
題目のこれをみてハあて出字の位を
いきを深くうくぬてハいかうへしく

此位体に似されハあしかるへき也
一拍子と申事ハ歌のつゝき此家ふもま
御くものさかしく拍子ハたかものゝされ
とも御ゝ御事あり其かゝくらへ
おもくかろくかろくさやけくやくあり
かしこ事よ心か御きれある事と
もあり歌とらひか題うさ絵きいハ

つまあとりくてう流ハ拍子とくとう
は以ゝ拍子一旋くの曲を志つゝよかや
いふへしありさハられごゝろわりて
志くりきうらわしあられにしも和
とりかへしを従よりそ流ともこの
うら地にてをふらくう庵しつそれ
つまりて共をあしらうハ志てりさ

かゝり也して音曲舞の拍子ハみなかゝるの
ふりつし音曲を稀かして拍子のうらはね
をハ用ありとこ知このうら地はこ太鼓
の藝人拍子を本ゝうらそ拾くと知
ハ新流よ入不逆拍子の役人ハ舞方音
曲を本ゝにし舞方音曲の役人ハ拍子
を本とすへしかくて又こそ由緒として芸

引同心の曲打てハあるへしれともしるへし
拍子ハ八拍子なり本拍子間あいの拍子
間りなしと也本拍子ことにきとあ
いの拍子なりあいのひやうしハ知るへし
此本拍子の間也小拍子事ハ大拍子
也ハ二拍子也ハ三拍子と名目すあい
の拍子ことハり孫拍子事ハ一拍子也ハ

〽拍子こと、ハ拍子也この外拍子の名目
乱拍子やなど拍子あいの人曲拍子是ハ拍子
の曲也曲是曲大鼓流にと也子拍子さり
土地の拍子あり當流にたえて拍子
拍子別あるに拍子ハうし序破急を
定也序ハ一段破ハ三段急ハ一段とさためし
くりされハ破の形うきにハ舞すとも

らし給りきことを拍子のはかりハ急なれ
ハおそき所のしらへかはりしてとめ
こころきこと志らへしてきこうるや
徳あれハさうなるなみあそふ知かりる
らハ節ハさしう摩也音ハさうりハ破
急ハ急にちかくしうなりうへくなる急と
判もへし次きうハすこやうなるとき

うしの序ニさかり大てと拍子のはかりなきな
ゆへし 早歌 さうしうみをす拍子あかり曲流
ふもおすのはかあるをミあハ皆其緒あるに
皷ニ志くへのひやし凶之
愛ニ雅拍子を節事揺之
一 聲ハ事 平上 去入 □ の世云かり去入聲ハ下なの
このむことあり恢其のへし素か代 去入
のきくあるみちとおくいのの字あり

もろまりのさ性をおこすなりおこすハ文
性なりおこすうもあるされハ文ある色
性ヨ文ある好りゆ縁なる性を云
なり

一 琴ノ聴ノ事 是ハ横竪ニ云ことあ
を竪よりハ竪ヨリ始ることを横ヨリ云
かハりし律をハ竪ヨリハ呂をハ横ヨリ呂

又さかひ又相善としあり是ハ横竪之 是
始楽之下（きせそ）るもまつをハ横ヨリして其の
うち曲ニ志ていて竪之の根もあるへし
またすふのうふ てあるあひ善ヨ云
為しなれハ曲ヨ志ていハ竪ヨもかく
ハ横ヨもとるへし呂律横竪をゆるさ
さるへし

一
二字一曲の秘傳あり是ハ口傳あり此曲
南流にをいてとりわきこのみあり大
事二字を一曲によみたるあり甘節
に似たる又とも甘節ハ曲ありて節
あり是ハ趣緒によりおもてあり節之
あるハ人の云ふ事ありかならされ
みれハおもしろかりやさしハ在をこと事なる

おもしろハされハみなりの紀也へにる新なり是
にして秘事なり　あるとされ在所をきさハお
まさる所也かなる人あり志りを傳并思ふ
所もなるし習ねやの所とかり志の
かりその二文字なりとてりしよろ紀へふを
らむやうにみるへし此ハ一二之路
也あるへ釣針のこくなるへし

一無味智なる事　無なるに付ての本道

人には又味の好味あり　あまきをこのむあ
りからきをこのむあり　あまからきを之
むありにかく志ほしくの好物のあるもの
なりしかれども其味と云りの本来一水にられ
を水味又しきに何物かあらん　無
これらふさらりぞ　又味をふくまれて

加

本来無味のありといふを知　無なるも其
一味に定する所あれハこれさらにもの
あり好有あり因つ於て次水なるとこ
を無味諸味よりてハ定せずして諸
人の口よりかふてもれのとの人のこゝによ
りて又無味を有しつ事本水の
ふ好かりしいふわれ又味を知る事

ちく海此まうみて風をかゆへしさる
程に言せすして面白き風味になり
なり舞此風味音曲の滋味もこれのす
ことに言せされハ水の形ハ是くらふへ
し花ハ醉味ともに一水の徳をもちて
係事めきて水ハうつハものよりて二方圓
のかたりをなす味のあらはれいとなす

人のこれ之形の外よりて新味の感を
なさし事まつしあるへしすきし一水ら
皮肉骨の三曲とあらハれハ山河大地
悉草木一切姓なさし水新生り寰に六
輪一露と云題道の一巻を作りて之
水輪の形なり一露ハすなハち一形の
初利鈍勢骨にて先ならさし三曲なり

あるい入声なとくれきあらハ氷
ハ和らぐとりそ拂ふ一無味とりて
のらとす音曲ハ吟詠くわをかれハ
一音也さるを無味とす常ハ序破
急よらはらくかねよるつを和らけ
いうすると音せさるを無味とす音ハ
ふさ水ニ入又兎角らくとるをきこゆそ

そろそを残せ心ろとも又とろ海の事
引ニ意ニ無所住ニ生其心也ニ大秘ニ
可懸ニ/\又金莫傳し

一 比一水　秋首古の入門より初心の
分位もそれハ一水流味と思ふ處ハ
又其藝術も一の清味なりとて

の位の所なれハ諸味一々とある
是則流通自在なれハ手附も様々
離し好みさる心にもあらハを
して昔来の有味をうつかり
先大諸味一水と成にこ
一世に年来の祝言甚むきて向き都
来し来して果るの所ハ有ふらく

かへさ形れとも遊著にまきされし
猶を手すれおほしす急にあり独
形りて闇曲の全にあり半あへし是
ハ様もあらうの所お上して位あらく
まかれと思ふ所に上一代唐物の絵と
のさうのふもすてに段段しぬれ
ともまうらにおきてもわうさ所の具

らすある色きれとも眼精を開ところ
せぬよりてよろしきところとゝろかろ
有し是をしられは付てもしれて言所
の物まねやうよいふもくるしからず
し是ハ大なる曲場の様を廻し心を含
く色よろしきまゝ所にあるべし安
の風ハ至上の位なれハ別の事

せりつ候まゝ是をしられ少事乞ちくよろ
有し是則明曲にして後々の宝
となる月のごとくなるべし花の浮
あまりけれとしるところと云とも月花
是ハさいはひあるまじきそうらん曲折す
うし曲なく風折色よりあとも心西
よわりハ夕りなきく月のごとくなれ体

小哥なと絶のうたひものハ文句京縁と
すり事ともおほくしぬて周防節曲
のふしを志るへし吉田ふし清曲写曲
也あるへし

一 羽拍子の事一方事かならず合
ありひやうしよりすゝむハさゝとし
天地未分ハかならず開闢ハひやうし

あり万物はかならずあふう節あるへし
又かなの内よりひやうしあり拍子のうちよ
かとある事をしらぬ事とて知れぬ也
大かたきところのあるの面白きあり
これ又出かゝるよ拍子あるへしあらましあ
ハ得るへしこれ正直を性として慈悲
をもとし天地を父母とする心を清泰

平なり万道に秀たる為し　又
習道の仏に云仏の二なり様に志ある
て法をよく手習よりて人によりん
うけすゝめぬよ似ねて来べき事真
仮一術の法なるべし

此一帖不被道之奥義秘之

中之秘也無心智事常
住不滅之妙範を一動万舞
に与せり手者成べし一秘之

長禄六年十二月十二日

金春
竹田大夫

金春八郎
秦安照

金春家所出於秦河勝歴代
秘函傳家督一人而其他庶子
儔孫遂不能窺閫奥於萬
一矣雖然如是元七郎氏勝
不幸早世故老父家傳之秘

奥相續而欲傳之子々孫々而
以張萬世悉家傳秘曲教授
於我ゝ所今相傳也今又汝家傳
秘曲不遺所令教授也莫令
断絶矣

明暦二年丙申
三月五日
竹田金春八郎
大夫
六郷右衛門
今春七郎殿
参